

とは客商の占める役割の大きさとにらみ合わせると、いつそう考究の余地があるように思える。

最後に、博士には『南洋日本町の研究』という本書に關係するこ
とふかい名著ものこされている。研究者のすくないこの方面の研究
にあつて、このように精彩ある基礎的研究を達成されたことをふ
かく慶祝したい。附録とされた五種の史料も容易に得難いものであ
るが、このような主要な史料を惜しみなく学界に提供されたことに
も、ふかい敬意を払うものである。

(A5版四八頁 昭和三三年四月弘文堂発行 定価九八〇円)

千家尊宣先生
還曆記念

神道論文集

柴 田 実

千家尊宣氏は皇室と並んでわが國最古の家系ともいふべき出雲國
造家の嫡流として、国学院大学に國史を修めて後、その家を嗣いで
出雲大社教の管長・教統に任じ、信徒の信望を一身に担うとともに、
また母校の教授・理事として後進の誘掖に當り、かたわら「神道學
會」を組織していわゆる「前むきの神道」を鼓吹されつつある斯道
の重鎮である。昨年九月その還曆に當つて記念のため、知友・門下
四十余名から氏に贈られた本論文集は、今日神道研究の第一線にあ

るほとんどすべての人びとを網羅し、その意味で現今の神道學界の
全貌をさながら表明するが如き観ある書物である。もつともA5判
全冊九三七頁にも及ぶ巨篇ながら、寄稿の各論文は一篇平均二十頁
そこそこであつて、広範な問題を論じ、深遠の論議をつくすには適し
ないため、おのずからいわば手ごろな論題に限られているのは、こ
種の論文集の常として己むをえないところであつて、中にはとく
に研究論文というに値しない一種の所感文のごときものも若干混じ
ているのもあるいは恕すべきであるやも知れない。従つて今、その
中比較的主要な論文のみを選んで、その論旨の概要を紹介し、若干
の所見を述べたい。

さて本書は神道學の問題、出雲大社・出雲および桐廬舎千家尊宣
先生を語る、の三部に分たれているが、まず第一部において

肥後和男・鎮魂の儀について 伴信友の鎮魂伝の所説を一応参考
にしつつ、この古い呪術の本源の形式とその意味とを探らうとした
もの。それは今日までの解説ではもつぱら宮中において行われたも
のとされているが、より古くは恐らく一般の人びとの上にも行われ
たものであらうとして、沖繩におけるマブイの慣習を参考し、それ
が古代における巫女一般のわざであつたことから、旧事本紀にいう
ところ、物部氏は古くから政治・軍事の方面において顕われているが本
來は呪術の家柄であつたところから平安時代に至つて斎部氏等に対
抗して、自己主張を試みたものであつて、鎮魂の儀は天鈿女命の遺
跡だとする古語拾遺の所伝の方が信用するに足ると論ぜられる。そ
して最後にそのような一般的な鎮魂が後代宮中を除いてほとんど行

われなくなつた主な理由は、仏教とくに真言密教の加持がそれにとつて代つたことにあるであらうとする、示唆に富んだ指摘をもつて結んである。

岩橋小弥太・神戸及びび神郡について 神戸は普通神社に属する神戸と解せられているが、神戸は一般の封戸とはよほどその性質を異にするもので、個々の神社に一戸、二戸と零細に分属しているとともに、総体として神祇官に属し、その田租はすべて一旦神祇官に取藏され、普通の封戸の租はその半分が給主に与えられるのとは大いに相違している。また神郡とは神戸の大なるものと説かれてはいるけれども、本来は神領の郡という意味で、その成立の事情は国造と郡領との關係に准じて理解されることなど、極めて精緻な考察をもつて、主として古事類苑に代表される通説の誤を訂正している。

村尾次郎・神庫と神宮 古語拾遺にいうところの斎藏・内藏・大藏三藏について、その成立の過程と管學者の問題を究明することによつて、古代における政治的統属の關係が神庫を焦点として行われた事情を述べ、斎部氏よりもむしろ物部氏の意義の大きかつたことを説く。近時園田香融氏が「倉下考」において提示した見解を補足し、それを一層發展せしめた論考として併読されるべきものであらう。

近藤喜博・春日信仰の古代的意義 春日流記・験記を資料としてその信仰の原初の意義を究めようとしたもので、それが単に藤原氏の氏神としてよりも、むしろ庶民信仰として雷神の形をとることを論じ、とくに若宮・護法の解明に注目すべき見解が示されているが紙幅の制限もあり、いささか意余つて言足らずの感がある。

岡田米夫・神道五部書に見える古縁起の邇及性 五部書の中、偏

仏二教の理説ならびに外宮祭神の特異性を説く条項を除いた神宮の古縁起を、それより年次の古い師光年中行事ならびに大神宮諸雜事記にみえる縁起に对照して、その邇及性を論じた堅実な論考である。

豊田武・神道的世界観の展開、久保田収・中世神道の系譜 ともに中世神道思想の要をえた概観であるが、一がヨーロッパにおけるキリスト教と対比しつつ、ひろい社会的視野において神道的世界観展開の特性を見ようとするに對し、他は中世神道典籍の精緻な批判と分析を踏まえつつ、伊勢神道から兩部・山王・御流・三輪流等諸派の神道説が生じ、それらが如何に吉田神道の中に綜合止揚されて行つたかを説き、思想史研究の正統的行き方を示している。全冊中もつともまとまりのよい論文である。

西田長男・吉田神道の成立について、宮地治郎・大嘗祭における神饌に就て それぞれ京都吉田家ならびに鈴鹿家所伝の新資料を紹介し、それにもとづいて通説を補強したものである。

竹岡勝也・能楽に於ける神 普通に仏教的世界観の上に立つて、妄執の衆生群衆がいずれもつには成仏済度される因縁を説くものと解されている能楽において、多く老体や女体に表現される神が一面においては鬼神怨霊と称せられながら如何に人間の親近な存在であつたかを説く。本稿を寄せて程なく急逝された竹岡教授の正しく絶筆というべきものであらう。

鳥巢通明・垂加神道の成立とその意義 闇斎における朱子学とその神道説とを如何に統一的に理解するかという困難な問題に對して、その生涯にわたる思想の遍歴と發展の過程を跡づけることによつて明快に解答を与えたもの、背後に尾藤正英氏の史学雜誌に寄せた闇

齋論に対する強い批判がかくされている。

森田康之助・二宮尊徳の神道、中西旭・神道経済についての一考察
一は尊徳の神道を「前向き神道」としてその体得を庶幾し、他はこれを「徹せざるもの」と評して、さらに経済と祭祀との一致を説くべきであるとする、ともに尊徳研究への一寄与というべきであろう。

第二部では高崎正秀・大國主神名義考 題名の通り一神にして八通りの名を有するこの神の呼称について、一つ一つその意義を考究したもの、古語の解釈に実感を重んずる故折口信夫博士の学風の影響が強い。

徳永春夫・記紀に於ける出雲の伝承 神代巻における出雲平定の物語や崇神紀における出雲神宝の物語はいずれもヤマト側で構成されたもので、イヅモ固有の伝承ではないとする立場に立つて、かつて井上光貞氏等によつて説かれた出雲国内におけると杵築と意宇（出雲氏）との勢力交替の事実が大和朝廷の出雲平定物語の基本となつたであろうとする説を反駁しているが、その根本前提についての論証が本論には省かれているため、全体として甚だ説得力に欠けているとの感を免れない。

山田孝雄・崇神天皇紀にある小児の神託の詞 さきの竹岡教授の論稿同様、これまた老博士の絶筆になつた論文と考えられる。古来難解の託言として、その定つたよみ方さえ伝わらなかつた「玉菱鎮名、出雲人祭云々」の詞について逐語的にその訓詁法を勘え、文全体としての意味をよみ解こうとしたもの。宣長ならびに信友の考説を向うにおき、それに対する自説を一つ一つ打立てて行かれる手堅さはさすがに一代の文献学者の絶筆たるにふさわしい。もつともこ

の神話の意味を要約して、出雲大神の祭祀を復興せよというにあるとされる博士の立場は、その詞が記された崇神天皇紀の記事をば一応そのまゝ歴史事実とみるものであることというまでもないが、もしこれを疑う人の立場からすれば神託の意味もおのずから違つた色彩をもつに至るのではないかと思われる。

小島鉦作・中世の出雲大社と社寺領知制 中世、皇室をもつて本所とした当社とその社領の特殊性について詳細な解説がなされているが、その事實はひとり神道史の問題たるにとどまらず、ひろく中世の庄園研究を事とする社会経済史家にも知らせらるべきであるかと思われる。

以上のほか藤井貞文・後醍醐天皇と出雲大社、平田俊春・千家俊信と本居宣長、谷省吾・出雲大社と鈴木重胤、西角井正麿・出雲と武藏と、福山敏男・出雲大社の社殿、村田正志・出雲に於ける古文書の調査等その内容について紹介すべき論考も少なくないが、紙幅の関係上これを省略する。

最後に全体として本論文集を通覧して大社教自体に関する研究の一篇も見出せないのはまことに淋しい感がする。その成立はもとより明治初年にあるとしても、その基をなした一般庶民の大社への信仰は由来久しいものがあり、今日においてもいよいよ盛大に向かいつつあるやに聞いているが、そうした信仰の基礎がいずこにあり、またそれが何を意味するか、ということについて何びとかが透徹した考察を加えるのではないならば、いわゆる神社神道と教派神道との二途はいつまでも帰一することがないのではないかと思われる。それこそ現今神道学界のもつとも重要な課題でなければならぬ。

(A五判九六頁 昭和三十三年九月 東京都港区麻布霞町一神
道学会発行 頒価一、五〇〇円)

The Growth and Fluctuation of the British Economy 1790—1850

An Historical, Statistical and Theoretical Study of
Britain's Economic Development, By A. D. GAYLER,
W. W. ROSTOW, A. J. SCHWARTZ Oxford, '53 II
Vol. pp. 1028.

合 田 裕 作

このモニュメンタルな著書は、一九五三年度に刊行されたものであるが、この時代について貴重な統計的研究に貢献した故ゲイヤー氏の仕事を、周知の論文集「十九世紀イギリス経済」の著者ロストウ氏がうけついで、コロンビヤ大学の社会科学研究所助成金により、戦前からの計画が実現されたものである。統計的研究としては、コンドラチエフ、ペバリッジ、ホーフマンらの線に沿う仕事であり、物価、貿易、投資、工業、農業、金融、労働等にかんするこの時代についてのえられるかぎりのほとんどすべての統計が集成され、そのおのおのがナショナル・ビューロー・オブ・エコノミック・リサーチの経済時系列分析の方法に厳密に従って整理され、その方法に従ってこの時代の経済変動のスタンダード・パターンが発見が意図

されている。そしてその方法による統計的発見にもとづいて行われる経済的分析の内容は、例えば日本にもよく紹介されているアンヘトンの「産業革命」の終章、「コース・オブ・エコノミック・チェインジ」に要約的にふれられた産業革命の経済史の側面を綿密にとりあつかっている。以上が第二巻。第一巻は、著者の本来意図したように、経済記者的な筆致でもって、各サイクル別にイギリス経済の各分野の同時代の変化を、同時代の観察者の書いた経済記事からの引用を交えながら、追いつける。

統計的な発見に従ってのみ当時のイギリス経済を診断して安全であるほどには、我々は完全な量的知識を持つておられない。いわんや当時の理論家の言葉は、党派的であるに加えて、極度に抽象化された水準において語られたものであることは驚くべきほどである。従つて我々は、当時のその理論家にとつて既知のことであつた同時代的な経済史——経済年代記——が容易に接近できるようなかたちでここに提供されたことをありがたく思う。このような統計的、理論的、歴史的研究の総合によつて、はじめてリアルな理解が我々に可能となるのである。ただ、ふつうの用語法によれば経済史は制度的な変化をその内容とするものであるが、この書物の表題のグロース、長期的変化、は制度的、技術的、社会的変化が直接にこの書物の中で取扱われることを意味しないし、又、理論家にとつて、巨視的動学がここで論ぜられることをも又この標題は意味しない。この語に該当するものを求めるなら、それは長期的趨勢の統計である。所謂長期波動とは区別されているが、どちらかといえばそれに近いものである。この点物足りぬ感を受けるのであるが、経済成長のモデル